

副業や兼業を積極的に受け入れよう。こうした動きが少しずつ広がっているように見える。いろいろな経験を通じて新たなスキルを身につけ、働き方の幅を広げることにもつながるので、兼業や副業は好ましいものであると思う。ただ、兼業や副業に時間を取られすぎ、本業がおろそかになっても困る。だから、多くの企業ではまだ兼業や副業を積極的に認めることに消極的であるようだ。

研究職としてのキャリアを続けてきた私にとって、兼業や副業をどこまで行うのかは常に迷う問題であった。あるテレビ局から毎月どこかの1週間、夜の経済番組でレギュラーコメンテーターをしてほしいと依頼を受けたときには、受けるかどうか1年以上も迷ったことがあった。テレビでのコメントは、本業の研究や教育に関係ないのでないか、と周囲に言われることを懸念した。

東京大名誉教授(国際経済学)

伊藤 元重

論壇

しかし、月曜日から金曜日まで夜のスタジオに座ってコメントしたことは、私の経済の視野を広げ、経済の動きを深く読むことに大いに役立った。面白いことに、経済は月曜日から1週間で連続的な動きをしており、それをリアルタイムで追いかけることで学ぶことは多かった。テレビを通じて多くの人に話をするわけだから緊張感があった。ただ、その緊張

変わる働き方と兼業・副業

感ゆえに懸命になって目の前の経済現象について考察することになった。ある大手企業のアドバイザリーボードに入ることを求められたときも迷った。当時としては報酬が多かったこともあり、報酬をすべて大学に寄付することで大学に認めてもらった。結果的に見れば、企業の内部に入り込んで経営課題について突っ込

んだ議論をすることは、私の企業や産業の見方を深めることに大いに役立った。大学の中で文献に埋もれ、データ分析に没頭する研究も必要だろう。ただ、現実の経済について学生に語るのには、企業の経営に触れ、政府内の政策論議に参加し、そしてマスコミとの接触も必要だろう。そうした外的世界で学んだことが、学

生への授業でも役に立つ。私の研究者人生は兼業と副業なしには考えられないものとなった。少なくとも経済学ではそうしたライフスタイルが有効であったと今は確信している。

私の話はさておき、これまでどちらかと言えばタブー化されていた兼業や副業が世の中で受け入れられようとしているのには理由があるだろう。

コロナ禍で、働き方が大きく変わろうとしている。こうした変化は、兼業や副業について前向きに捉える絶好のチャンスであると思う。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。